言語文化学専攻

国語国文学

中国語中国文学

英語英米文学

ドイツ語フランス語圏言語文化学

言語応用学

表現文化学

人材育成の目標

言語にかかわる文化現象の全領域、すなわち、言語、文学、文化およびその関連領域を、言語を通じて根源的に解明することを目的とする。従来の言語単位の専門分野にくわえ言語応用、表現文化という新たな分野を増強し、都市化、情報化、国際化の時代にふさわしい教育研究を実現する。さらに西洋古典学、言語学などの分野をも含めた総合的な言語文化学を修得させることで、鋭い言語感覚と言語運用能力を備えて、研究者、専門職業人を問わず国際社会において活躍しうる人材を養成する。

国語国文学専修

言語文化学専攻

専修紹介

本専修は、日本語と日本文学について、知識と視野を広め、研究を深める場を提供しています。

言葉も文学も、時代に応じて変化して来ました。特にめまぐるしく移り変わる現代にあって、古典の世界は遠ざかっていっているように見えます。しかし一方で、言語の根幹的な部分は安定しており、人間の感情やものの見方の根本は古代からそれほど変わらない、むしろ一致している面も多分にあります。言語・文学の時代的な展開、地域やジャンルの位相の違いを視野に入れて対象の特徴をつかみ取り、かつそこに通底する本質的なものをも酌み取る、そういう姿勢を本専修は重視しています。

物事の本質的な面をつかむためには、極めて具体的なことに取り組むことが重要です。文学で言えば作品の本文・作者・時代背景などについて、語学で言えば個々の言語現象について、丹念に着実に調査・考察を重ねていく必要があります。このような実証的な研究姿勢を持つことがまず求められます。その上で、対象に迫るための豊かな発想と深い構想力を持つことが必要で、この両者のバランスが取れた研究ができるようになることを、本専修は目標としています。

教育方針

前期博士課程における研究指導、後期博士課程における論文指導の時間においては、各自の研究テーマとなる作品・言語事象について、本文の精密な読解・注釈、用例一つ一つの検討といった具体的な考察とともに、そのような個々の考察が、研究対象の全体の中でどのような意味を持つかということを発表することが求められ、それに基づいて教員と受講生が議論します。その積み重ねが、修士論文、博士論文となって結実していきます。前期課程においては、国文学研究Ⅰ～Ⅳ、国文学研究演習1～4、国語学研究、国語学研究演習、国語国文学総合研究Ⅰ・Ⅱなどの授業科目も設けられています。ここにおいても基本姿勢は同じで、発表と議論(その集約としてのレポート)が重視されます。もちろん授業科目ですから、自分の専門以外の分野を学ぶ場でもあります(非常勤講師科目を含む)。専門分野の研究を深めるためには、隣接分野についての知識を広め深めていくことが必要なことは言うまでもなく、また、分野によって発想の仕方や焦点の絞り方が異なるところもあって、よい刺激になります。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/jpn/

専修の特色

教室行事

4月上旬に、大学院と学部共通の「教室ガイダンス兼新入生歓迎茶話会」が開かれ、履修や研究室の利用についての説明があり、また、先輩・後輩間、同級生間の交流を図ります。秋には研修旅行があり、学部生とともに、古典文学ゆかりの神社仏閣や史跡をめぐります。3月には、予餞会が開かれ、大学院修了生・学部卒業生を送り出します。院生はふだん論文指導・研究指導の中で繰り返し発表をしますが、専門領域を越えた院生全体の研究発表会が9月と12月の年2回あり、お互いの研究成果を発表し、議論しあっています。また、学部4回生の卒業論文中間発表会が4月と10月に開かれ、大学院生もそこに参加し、議論やアドヴァイスをします。このような行事でなくても、大学院・学部指導室（通称：共研）で、院生と学生がともに勉強し、学部生の演習の発表のアドヴァイスを院生がするというようなことが日常的です。教えることは学ぶことです。

出版物

学術雑誌『文学史研究』（1955 年創刊）を、毎年1回刊行しています。「大阪市立大学学術機関リポジトリ」に、初期の論文から最新の論文まで公開されています。

その他の特色

学会活動として、大阪市立大学国語国文学会が1954 年に設立されています。年に1度開催される総会では、講演と研究発表が行われます。大学院生はここで始めての研究発表をするということが多く、また、卒業生の方々と交流できる機会でもあります。

毎年8 月に文楽を学ぶ上方文化講座を開催しており、市民にも開かれた講座として10 年以上親しまれています。大学院生や学部生も、運営に参加します。

所属教員

丹羽　哲也（日本語学、現代語を中心とする日本語文法）

小林　直樹（中世文学）

久堀　裕朗（近世文学、人形浄瑠璃史）

奥野　久美子（近代文学）

山本　真由子（中古文学）

丹羽 哲也　教授

NIWA Tetsuya

専門分野

日本語学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

現代語を中心とする日本語の文法と意味。「は」と「が」の問題に長らく取り組んできて、『日本語の題目文』という著書にまとめました。それに関連して、係助詞・副助詞、テンス・アスペクト、複文、敬語等々、日本語文法の諸問題を研究してきています。最近は、連体修飾構造や存在文の分析などを通じて、名詞の文法と意味の考察に重点を置いています。名詞は他の品詞に比べ文法的な性格が顕在的でなく、学界でも研究の蓄積が乏しい中、果てしない道を歩みつつあります。

メッセージ・教育方針

文法研究の魅力は、普段使っている何気ない言葉の奥に潜む構造や体系の発見と構築にあります。研究指導の際は、個々の用例のきめこまかな分析と理論的な枠組みの構築とのバランスを重視しています。また、現代語を研究対象とするとしても、歴史的な背景をおさえておくことが大切です。

［主要業績］

［著書］『日本語の題目文』（和泉書院，2006）
［論文］「相対補充連体修飾の構造―準体節との対応―」（『日本語の研究』6 巻 4 号，2010）
「連体修飾節構造における相対補充と内容補充の関係」（『日本語文法』12 巻 2 号，2012）
「所在文の広がり―存在文との対応―」（『文学史研究』55 号，2015）
「存在文の分類をめぐって」（『国語国文』84 巻 4 号，2015）

小林 直樹　教授

KOBAYASHI Naoki

専門分野

日本中世文学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

日本中世の説話伝承文学についての研究。とりわけ現在は、鎌倉後期の遁世僧・無住道暁の学問基盤と彼を取り巻く遁世僧ネットワークの究明を主要な研究課題としています。また、遁世僧の形成する禅律文化圏と伝承世界との交渉の問題についても、無住の著作を中心に据えながら、鎌倉前期の律僧・慶政の著述や天台系律と関わる室町期の『三国伝記』なども視野に入れて、解明することを目指しています。さらに、無住と同時代の歴史叙述『吾妻鏡』の説話伝承的記事の分析にも取り組んでいます。

メッセージ・教育方針

日本中世の古典テクストを、作者の教養や学問基盤、宗教的環境や人的ネットワーク、時代思潮などとの関わりの中で総合的に読み解いていきます。テクストの丁寧な読みと、それを背後で支える、地道な文献博捜を厭わぬ姿勢とが要求されます。

［主要業績］

［著書］『中世説話集とその基盤』（和泉書院，2004）
『日光天海蔵 直談因縁集―翻刻と索引―』（和泉書院，1998，共編著）
［論文］「『閑居友』における律―節食説話と不浄観説話を結ぶ―」（『国語国文』84-10，2015）
「中世日本仏教の死生観と鎮魂―遁世僧の視点を通して―」（『韓国人と日本人の生と死』景仁文化社，2015）
「無住と遁世僧説話―ネットワークと伝承の視点―」（『論集 中世・近世説話と説話集』和泉書院，2014）

久堀 裕朗　教授

KUBORI Hiroaki

専門分野

日本近世文学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

江戸時代の文学・演劇を専門にし、特に人形浄瑠璃（文楽）について研究しています。これまで古浄瑠璃から近松に至る浄瑠璃史の流れを「語り」の構造の変化に即して分析したり、近松作品の特徴を修辞の面から分析したりしてきました。近年は、人形浄瑠璃の一大拠点であった淡路の人形座に着目し、その歴史・興行形態・上演作品等を明らかにしながら、淡路座と大坂浄瑠璃劇壇との関係について考察を進めています。また淡路座も含めて、広く人形浄瑠璃の興行史を視野に入れ、現在の文楽に至る伝承過程を明らかにしていこうとしています。

メッセージ・教育方針

まずは個々の作品を、それらを生み出した時代の文脈に即して解釈することが大切です。我々現代人の好みに適う点を古典作品の中からすくい上げるのではなく、まずは古典を歴史的文脈に返して読み取ることによって、我々が思いもつかないような発想を古典の中に見出し、そこに感動し、ひるがえってそういう発想をこれまでしたことのなかった己を知る。そうした作品との対話が、古典を学ぶ醍醐味だと考えています。

［主要業績］

［著書］『上方文化講座　菅原伝授手習鑑』（和泉書院，2009，共編著）
『上方文化講座　義経千本桜』（和泉書院，2013，共編著）
［論文］「淡路座の『仮名手本忠臣蔵』―現行文楽との相違とその価値―」（『歌舞伎 研究と批評』第 57 号，2016）
「浄瑠璃『二名島女天神記』の成立と伝承」（『国語国文』第 86 巻第 6 号，2017）

奥野 久美子　准教授

OKUNO Kumiko

専門分野

日本近代文学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

日本近代の小説作品研究。芥川龍之介などの大正期文学を中心に、典拠（種本）や草稿、原稿を使って作品の成立ちを研究し、また文壇、社会状況など作品が書かれた当時のさまざまな背景の中で作品を読み直す試みを続けている。近年は、大衆の娯楽であった講談本が芥川などの作家に与えた影響について研究し、日本近代文学を育んだ土壌が、西洋文学や古典文学だけではなく、大衆娯楽にも及んでいたことを具体的に立証している。また本学に寄託されている、初代学長で芥川の親友、恒藤恭の関係資料を生かした研究にも携わる。

メッセージ・教育方針

私が考える国文学研究の最大の目的は、未来に残すべき作品に、今できる最高水準の校訂と注釈を施して次世代へ贈ることです。「源氏物語」などの古典も、そのようにして私たちに受け継がれているのであり、近代文学も五百年千年の後に残したければ校訂と注釈が必要です。大学院の授業も、本文校訂と注釈を中心にすすめています。

［主要業績］

［著書］『芥川作品の方法―紫檀の机から―』（和泉書院，2009）
［論文］「恒藤恭「向陵記」と一高時代の芥川龍之介」（『生誕 120 年芥川龍之介』翰林書房，2012）
「明治大正期の国定忠次もの―菊池寛「入れ札」を論ずるために―」（『文学史研究』，2013）
「芥川「俊寛」と『攷証今昔物語集』」（『芥川龍之介研究』，2015）

山本 真由子　講師

YAMAMOTO Mayuko

専門分野

日本中古文学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

平安時代の文学、主に漢文学・和歌の研究。平安朝の漢詩文を収めた『本朝文粋』、最初の勅撰和歌集『古今和歌集』などの漢文学・和歌の作品を中心に、漢語表現と和語表現との関わりを考察し、作品の表現の成り立ち、特質を研究しています。近年は、歌会で作られた和歌に冠せられる序文「和歌序」に着目して考察を進めています。和歌序は、漢文でも仮名文でも記され、和歌に関わりの深い表現がなされます。漢語表現と和語表現とが関わる諸相を具体的に解明しながら、和歌序と和歌を読み解くことを目指しています。

メッセージ・教育方針

平安時代の文学の表現については、漢文学と仮名文学とが密接に関わりながら、相互に新たな表現を獲得し展開していったことが、これまでにも幾多の研究によって指摘されています。平安時代の漢文学、仮名文学の作品を読むには、双方の関わりを視野に入れて、多くの文献から適切な用例を探し、注釈を施して、読み解くことが大切だと考えています。

［主要業績］

［論文］「『順集』の「うたの序」―源順における和歌序と詩序―」（『国語国文』82-6, 2013）
「大江千里の和歌序と源氏物語胡蝶巻―初期和歌序の様相と物語文学への影響―」（『国語国文』83-6, 2014）
「北陸豈に亦た詩の国ならんや―源順を送別する宴の詩序と詩歌―」（『和漢比較文学』53, 2014）

中国語中国文学専修

言語文化学専攻

専修紹介

中国文学、言語、文化を体系的に研究し、幅広い中国学の素養を身につけた専門研究者や高度専門職業人の養成をめざしています。教員スタッフの研究分野は、清末民国から現代に至る近現代文学や中国演劇、近世中国語を中心とする語法や語彙、中国字書史・音韻史、さらに映画を中心とする現代中国文化研究と幅広く、それぞれが独自の視点から、研究を行っています。前期博士課程の段階では、中国というフィールドの奥深さと、多様性にまず触れたうえで、研究の土台を築くことが求められます。後期博士課程では、更に一歩進んで自分自身の問題意識をより鮮明にして、本格的な研究活動をスタートさせます。教員スタッフは、これまで蓄積された先行研究を咀嚼したうえで、新たな研究成果を紡ぎだし、次世代の研究者へと伝えることを自らに課しており、新たな視点からの絶えざる探究を使命としています。また、毎年、学外から第一線の研究者を講師として招き、様々な関連領域をカバーしています。課外には教員や院生のみならず、OB·OG や他大学研究者を交えた研究会、勉強会が多く開かれ、活発な研究活動を展開しています。

教育方針

本専修は文献研究を中心としながらも、映像分析という新たな研究分野に取り組む研究者をも養成しています。在籍院生には中国人留学生が多く含まれています。中国国内での4年間の大学生活では、気づきえなかった新たなテーマに本大学院で果敢に挑み、大きな成果をあげています。院生自身の努力と、教員の指導は言うまでもありませんが、大きく寄与しているのは、授業以外におこなっている研究会活動です。例えば、清末小説の会、中国当代文学研究会、京劇史研究会、現代中国語動作動詞研究会、映画研究会などが定期的に開かれ、先行論文の批判的検討や、自分の問題意識にねざした研究発表と討議、テキストの精密・正確な読解を旨とする読書会など、様々な研究活動を展開しています。これらの活動に主体的、積極的に取り組むなかで、研究方法を学びとることが何よりも求められています。また研究会では OB・OG 研究者や他大学の研究者との接点が日常的に確保されています。なお、本専修には、「社会人院生」も複数在籍したことがあり、仕事と研究を両立させながら、論文執筆に取り組みました。国籍・世代を超え開かれた研究の場であることも、本専修の特徴の一つと言えましょう。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/chn/

専修の特色

教室行事

教育研究に関する行事として、大阪市立大学中国学会を毎年7月、12月に開催しています。主に院生やOB・OGの研究発表の機会として機能していますが、他大学研究者による講演もあり、高度な専門的知識が提供される場でもあります。

出版物

『中國學志』を1986年より、年1回刊行しています。2002年には蘆北賞を受賞し、学術誌として高い評価を得ています。また刊行後には院生が主体となって合評会を開催しています。

その他の特色

各研究分野ごとに、院生・OBなどの参加する研究会が、ほぼ毎月一回のペースで開催され、切磋琢磨を続けています。

所属教員

松浦　恆雄（中国近現代文学、中国演劇の研究）

岩本　真理（中国語語彙史、語法史の研究）

張　新民（中国文化学、中国語圏映画の研究）

大岩本　幸次（中国古代字書史、中国語音韻史の研究）

松浦 恆雄　教授

MATSUURA Tsuneo

専門分野

中国文学

最終学歴 ▶ 神戸大学大学院文学研究科修士課程

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

中国語圏における20世紀以降の文学・演劇を、主にテクスト中心に研究しています。文学では、廃名という作家や穆旦という詩人が切り拓いた現代性について考えています。演劇では、20世紀以降、大量に出回るようになった紙媒体（唱本、番付、小冊子、チラシなど）の系統的な整理を進めています。こうした実際の舞台の雰囲気を伝えてくれる資料から、20世紀の演劇史を見直そうと思っています。

メッセージ・教育方針

大学で教員が学生に伝えることができるのは、学問の面白さとテクストを読む力だと思います。この両者は切り離せません。テクストの内容をより正確、かつ多様に読む力は、教員と学生が向かい合って授業をすることを通してしか伝えられないと、私は信じています。読む力がついて始めて、学問の醍醐味、奥深さに触れることができます。じっくりと学問、テクストに取り組む辛抱強さも必要でしょう。

［主要業績］

［著書］『中国のプロパガンダ芸術』（岩波書店，2000，共著）　『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』（世界思想社，2003，共編）
『帝国主義と文学』（研文出版，2010，共編）
［訳書］『深淵　瘂弦詩集』（思潮社，2006）
張貴興『象の群れ』（人文書院，2010）
［論文］“文明戯的実像―中国戯劇的近代自覚”（山口久和等主編“城市知識分子的二重世界”上海古籍出版社，2005）

岩本 真理　教授

IWAMOTO Mari

専門分野

中国語学

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

中国語は周縁地域でどのように学ばれてきたのか、この点が、現在、最も関心を寄せているテーマである。朝鮮における受容と研究の成果を比較対象としながら、主に日本での受容と普及の実態解明を課題とし、長崎を中心として拡散したルートと、琉球・薩摩を経て伝授されたルートの両者をそれぞれの言語事実に即して分析している。「文言」、いわゆる漢文の習熟を前提とする学習者層が想定されがちであるが、話し言葉の語彙・語法の習熟にあたっては、かえって障害となる面もあり、功罪相半ばとの指摘ができる。

なお、別の課題として動作動詞の意味のネットワーク分析があり、十年来チームとして取り組んでいる。

メッセージ・教育方針

中国語はどのような変化を遂げて現在の姿に至ったのでしょうか。意味をもった単位としての漢字同士が結びつくことで、2音節以上の単語やフレーズが無限に算出されます。時間軸上での推移と、方言にみられる地域差を視野に収めつつ、語彙・語法上の諸現象の解明に取り組んでいます。一つの例文から様々な事象を読み取ることができると楽しさが増します。

［主要業績］

［著書］“清代民國漢語文献目録”（學古房，2011，共編）
『『南山俗語考』翻字と索引』（中国書店，2017）
［訳書］『方言と中国文化』（光生館，2015，共訳）
［論文］「中国語動作動詞の研究　碰・撞」（『中国学志』貴号，2007，共著）
“唐話資料概観：最晩時期的唐話資料為中心”（“清代民国國漢語研究”、學古房，2011）
「資料『琉客筆譚』翻字、注釈」（『人文研究』第64巻，2013）

張 新民　教授

CHOU Shinmin

専門分野

中国文化

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

中国語圏の映画の歴史を研究しています。これまで、特に力を入れて研究を進めてきたのは、伝来期の上海映画、1930年代における国民政府の映画文化政策や芸術至上、娯楽中心を主張する「軟性映画」の理論研究および第五世代映画監督研究です。最近は、日中戦争期における日本占領地域の上海、中国東北地区、台湾、特に華北地域の映画製作や上映状況および映画政策について研究しています。

メッセージ・教育方針

学ぶにはなぜかと問うのが大切で、物事の本質を見極める努力を必要とします。学問は芸術と並んで人類共通の言語であり、国境や民族の障壁を乗り越える大きな力を有しており、芸術が人の心を豊かにするように、知的好奇心の追求としての学問は人々に夢とロマンを与えるものです。学問を通して、みなさんが可能性や夢を広げていかれることを期待します。

［主要業績］

［論文］“『毎日電影』時期的姚蘇鳳”（高瑞泉等主編“中国的現代性与城市知識分子”上海古籍出版社，2004）
「抗日救国運動下の上海映画界」（岩本憲児編『映画と「大東亜共栄圏」』森話社，2004）
「劉吶鷗の『永遠の微笑』と日本映画『瀧の白糸』」（応雄編『中国映画のみかた』大修館書店，2010）
「淪陥時期における華北の京劇映画について―「燕京」の作品を中心に」（松浦恒雄等編『帝国主義と文学』研文出版，2010）
「上海の映画伝来とその興行状況について」（『中国学志』无妄号，2010）

大岩本 幸次　准教授

OOIWAMOTO Koji

専門分野

中国語史

最終学歴 ▶ 東北大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

中国古代字書を主な資料として利用し、中国字書史および漢語音韻史の観点から研究を行っています。これまで、『五音篇海』（1208）また『群籍玉篇』（1188）といった金代（1115－1234）に登場した資料が字書史上に果たした役割や意義、また『五音集韻』（1212）や『皇極経世解起数訣声音韻譜』（1241）などの資料よりうかがえる金・南宋・元の時代の言語音体系、といったテーマで研究を行ってきました。最近は、本邦や欧州において編まれた字書や漢語文法書を対象として、言語接触や中国理解の諸相に関する研究も進めています。

メッセージ・教育方針

自身が心がけているのは「食い散らかしたような研究」はしないという事です。結論を急ぐあまり、実証性に欠けるつかみ所のない推論ばかり披露しても研究の価値はありません。膨大な史料が相手でも労を恐れず、やれば終わると腹をくくって整理を貫徹し、誠実な検討に繋げる姿勢が重要だと思っています。地味ですが結局はそれが早道だと、大学院生にも伝えるようにしています。

［主要業績］

［論文］毛利貞齋『増続大広益会玉篇大全』にみえる中国字書について」（『中国学志』第28号，2012）
“元代楊桓的《書学正韻》与《五音集韻》”（“浙江大学中文学術前沿”第2輯，2011）
「『皇極経世解起数訣』「声音韻譜」について」（『日本中国学会報』第63集，2011）

英語英米文学専修

言語文化学専攻

専修紹介

英語英米文学専修には、1953年に修士課程（前期博士課程）が、そして1955年に博士課程（後期博士課程）が設置された。英米の文学、文化、英語学における多用な現象を研究対象とし、その専門家、教育者の養成を目指し、これまでに多くの優れた研究者を送り出し、学界に少なからぬ貢献をしてきた。現在、「英文学研究」ではエリザベス朝演劇の風刺性やヴィクトリア朝文学の社会性が、「米文学研究」では小説技法が、また「英米文化学研究」では英米文化のイデオロギー性が、そして「英語学研究」では英語という言語に存在する規則や構造を対象とした分析が、それぞれテーマとして取り上げられている。そしてそれぞれの「研究」「演習」科目では、研究を目指す上で必須となる精確な読みの力が養われることを目指している。複数教員によって担当される「総合研究」、「研究指導」、「論文指導」においては、発表や討論などを通じて、研究論文執筆の能力が養われることを目指している。

教育方針

本専修では、厳密な英語の読解能力の育成を重視した指導を行なっている。同時に、豊富な所蔵研究資料を利用して学生が主体的に研究に取り組む姿勢を獲得し、その成果を積極的に学術論文として発表する技法の涵養にも努めている。また海外への留学や語学研修を奨励している。ネイティヴの教員や海外からの留学生と交流することによって、研究の幅広い視野を獲得できるように心がけている。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/eng/

専修の特色

教室行事

毎年、10月上旬に修士論文の中間発表会、2月に前期博士課程1回生の授業科目「総合研究」の発表会を行っている。また、毎年4月に新入生の歓迎会、2月に修了生の歓送会を行なっている。

出版物

大阪市立大学英文学会の機関誌として、『Queries』が毎年発刊されており、多様な研究の成果が公表されている。

『Queries』48号、大阪市立大学英文学会、2015年11月

『Queries』49号、大阪市立大学英文学会、2016年11月

その他の特色

現・退職教員と大学院修了生・現役生および学部卒業生・現役生からなる1972年創設の「大阪市立大学英文学会」があり、毎年秋の大会では、英米文学、英米文化、英語学、英語教育の分野に関する研究発表やシンポジウムや講演が活発に行なわれている。この学会は同窓会の役割も果たしており、同期生のみならず、教員と修了生・卒業生、先輩と後輩との交流も盛んである。

所属教員

杉井　正史（英文学、シェイクスピア論、エリザベス朝演劇論）

田中　孝信（英文学、ディケンズ論、19世紀イギリス文学・文化論）

古賀　哲男（米文学、アメリカ現代詩論、現代文学、北米芸術・詩論）

イアン・マレー・リチャーズ（英米文化学、ニュージーランド文学論、20世紀文学論）

豊田　純一（言語学、文化人類学）

杉井 正史　教授

SUGII Masashi

専門分野

エリザベス朝演劇

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

エリザベス朝の劇作家シェイクスピアの喜劇全般を対象としているが、特に最近では、初期喜劇に焦点を当てている。研究法は、台詞の持つ両義性に注目し、台詞や筋に込められている寓意や政治的、宗教的メッセージをあぶり出そうとする態度を特色とする。また、劇の登場人物の役割をキャンプという文化現象との関わりで解明しようとしている。

メッセージ・教育方針

シェイクスピア研究は、何世紀にわたって多くの人々によって行われてきました。しかし、シェイクスピアの作品は劇場で、テキストで日々新たな魅力を発し続けています。その魅力に触れ、味わうことを続けていきたいと思います。指導にあたっては、シェイクスピアの言葉の意味を重視したいが、映像でも作品を味わうことを目指します。

［主要業績］

［著書］『シェイクスピア：古典と対話する劇作家』（松籟社，2014，共著）
『シェイクスピア喜劇の隠喩的メッセージ―初期喜劇を中心に―』（大阪教育図書，2000，単著）

［論文］“The Allegorical Framework of *The Comedy of Errors*.” *Queries*（Vol.48，The English Literary Society of Osaka City University，2015，単著）

田中 孝信　教授

TANAKA Takanobu

専門分野

19世紀イギリス文学

最終学歴 ▶ 広島大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

19世紀イギリスの文学・文化が研究対象です。ディケンズをはじめ、ブロンテ、ギャスケル、ギッシングといった小説家のテクストを分析しながら、社会的・文化的コンテクストの中で権力による一元化を拒む「異質なもの」をジェンダー、階級、人種の観点から浮かび上がらせ、それらの持つ意味を探ります。近年は特に、大英帝国の首都ロンドンの空間構造に関心があり、周縁に放たれる中心世界の眼差し自体が帯びる曖昧性を、文学作品のみならず新聞雑誌や社会学関連の資料からも研究しています。

メッセージ・教育方針

文学作品は、作家の環境や思想、読者との関係など様々な要素を背景として成り立っています。特に社会が急激に変化した19世紀イギリスにおいては、文学は社会性を抜きには語れません。作家は社会が内包する問題とどう向き合い、どのように表現したのか。それらを読み解きながら、現代との関連性にも目を向けましょう。

［主要業績］

［著書］『ディケンズのジェンダー観の変遷―中心と周縁とのせめぎ合い』（音羽書房鶴見書店，2006，単著）
『英文学の地平―テクスト・人間・文化』（音羽書房鶴見書店，2009，共編著）
『スラム小説に見るイーストエンドへの眼差し』（アティーナ・プレス，2012，単著）
Dickens in Japan: Bicentenary Essays（Osaka Kyoiku Tosho，2013，共著）
『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』（音羽書房鶴見書店，2013，共編著）
『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』（彩流社，2016，共編著）

古賀 哲男 准教授

KOGA Tetsuo

専門分野

アメリカ現代詩

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

研究対象のコアは20世紀のモダニズム詩です（博論テーマとしてWallace Stevens、他にMarianne Moore、Hart Crane、John Berryman、John Ashbery、Gary Snyder、ランゲージ派詩人について執筆、アメリカ現代詩通史をウェブ講義。現在はLangston Hughesを中心とした黒人詩全般を研究）。ヒューズの詩は、大多数の白人アメリカ的主体にはない、アメリカ黒人特有な意識を代弁しており、黒人文化としてのブルースやジャズ音楽の歴史的文化表象の意味も追求しています。さらにカナダ的主体を代表する詩人 Margaret Atwood にみるアイロニー効果やポストモダニズムの問題を研究しています。

メッセージ・教育方針

ヒューマニズム的伝統とは何かをともに探求したいと思います。

教育方針としては、言語で書かれた文化表象の意味をその音声的側面を深く考察することによって、言語体験の意味を斬新に捉え直し、英語学習から専門的な文献研究にいたるまでの、包括的な学習体験に生かすことを考えています。

［主要業績］

［著書］ウォレス・スティーブンス』（世界思想社，2007）　［翻訳］『アイロニーのエッジ』（世界思想社，2003）

［論文］「冷戦時代の詩人たち」『冷戦とアメリカ文学』（山下昇編，世界思想社，2001）

「ポストモダニズムの終焉とアメリカ詩のゆくえ―アシュベリとスナイダーにみる主体と身体」（『身体・ジェンダー・エスニシティ―21世紀転換期アメリカ文学における主体』鴨川卓編，英宝社，2003）

「大衆詩における独創とはなにか―『豹と鞭』におけるヒューズの編集意識―」（『黒人研究』82 黒人研究の会，2013）

"Historical Moments in Langston Hughes' Montage of a Dream Deferred," (*Jinbunkenkyu: Studies in the Humanities*, 60 Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University, 2009)

イアン・マレー・リチャーズ 准教授

Ian Murray RICHARDS

専門分野

ニュージランド文学論

最終学歴 ▶ マッセイ大学博士課程

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

My specialty is New Zealand literature, and I am currently researching the novels of the New Zealand writer and educationalist Sylvia Ashton-Warner.

メッセージ・教育方針

I would like to encourage graduate students to use English communicatively in an academic setting, as if they were exchange students overseas.

［主要業績］

［著書］*A Reader's Guide to the Stories of Maurice Duggan*（Auckland UP, 1998, 単著）

Dark Sneaks In: Essays on the Short Fiction of Janet Frame（Lonely Arts, 2004, 単著）

Do-It-Yourself History: A Commentary on Maurice Shadbolt's "Ben's Land"（Lonely Arts, 2007, 単著）

New Zealand's Kendrick Smithyman: The Move Towards a Post-Colonial Poetic（Comparative Studies on Urban Cultures, Osaka City University, 2009, 単著）

Vision beyond Visual Perception（Cambridge Scholars, 2017, 共著）

豊田 純一　准教授

TOYOTA Junichi

専門分野

言語学・文化人類学

最終学歴 ▶ University of Manchester

学　　位 ▶ 博士 /Ph.D.（言語学 / 英語学）

［研究内容］

私の研究活動では、人間の言語を中心としたコミュニケーションにおける様々な現象を、認知科学を中心に学際的に考察しています。その言語が人間の進化の過程でどの様に派生・形成されたか、また現在世界に約6,000話されていると言われている言語に見られる普遍性と多様性は何であるかが、私の研究テーマの根底にあります。近年の研究で力を入れているのテーマは、現代英文法の類型論的に見た特性、死に関する宗教観と時制（未来形）の関係、視覚動詞の類型論的考察、言語の志向性と言語の教授法・習得などが挙げられます。

メッセージ・教育方針

言語やコミュニケーションに関する研究は、我々の生活の一部が対象になっています。面白い研究テーマは思わぬところに転がっているもので、普段から何気ないことにも好奇心をもって接することで、新しい切り口を開発できるかもしれません。

［主要業績］

［著書］*Vision beyond visual perception.*（Cambridge Scholars, 2017, 共編著）
Sense of Emptiness: an interdisciplinary perspective.（Cambridge Scholars, 2012, 共編著）
The grammatical voice in Japanese: a typological perspective.（Cambridge Scholars, 2011, 単著）
Kaleidoscopic grammar: investigation into mystery of binary features.（Cambridge Scholars, 2009, 単著）
Diachronic changes in the English passive.（Palgrave, 2008, 単著）

ドイツ語圏言語文化学領域

言語文化学専攻

専修紹介

本領域では、ドイツ語圏の言語、文学、文化、思想を研究することができます。ヨーロッパ北方、「森の国」と呼ばれ幾多の夢想家や思想家を輩出したドイツと、西欧と東欧のあいだに位置する多様性の国オーストリアは、長い歴史と伝統を持つ国です。それぞれに興味深い研究対象ですが、同じ言語圏に属しながらもはぐくまれてきた文化には違いがあり、その違いがまた私たちの知的好奇心を刺激します。原書をじっくり読む、研究会に参加して意見交換を行う、あるいは実際に現地に飛んで資料収集をするなど、真剣に取り組むのに不足はない魅力的な言語圏であるといえるでしょう。

教員3名は、このドイツ語圏を中心として「語学」「近・現代文学」「文化学」を研究していますが、本領域で可能な研究対象については、過去の博士論文・修士論文一覧（一部）も参考にしてください。

2年間の「前期博士課程」修了後、さらに3年間の「後期博士課程」を修了し、「博士論文」の審査に通れば「博士（文学）」の学位が得られます。現在、本専修に在籍する大学院生はそれぞれ関心を抱くテーマを選び研鑽を積んでいます。

教育方針

前期博士課程では、スタッフの専門分野に関連する基礎的なテクスト講読を中心とした授業で語学力を高め、講義科目ではテクスト理解のために不可欠な知識の習得につとめます。スタッフの研究テーマについては次頁以降、授業内容については大学院シラバスを参照してください。並行して論文指導が行われます。後期博士課程では、主担当教員の指導のもと博士論文の準備に専念します。

年に3回行われる独仏合同の中間発表会は、修士論文や博士論文を準備する上でよい刺激になるでしょう。研究の進捗状況によっては、大阪市立大学ドイツ文学会での研究発表、学会誌『セミナリウム』への論文投稿も可能です。また、大学間学術交流協定校であるハンブルク大学への長期留学もサポートしています。

当専攻のHPは定期的に更新されています。教室の雰囲気を知りたい方は次のキーワードで検索してください。　☞　大阪市立大学　独文教室

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/grm/

専修の特色

教室行事

大阪市立大学ドイツ文学会研究発表会を春と秋の年2回開催。大阪市立大学ドイツ文学会は、当教室大学院出身者、在学生、教員からなる学会です。2014年4月現在、会員数は74名です。

出版物

大阪市立大学ドイツ文学会学会の機関誌『セミナリウム』を年1回刊行。2016年度12月、第38号を発行しました。

所属教員

神竹　道士（言語学、ドイツ語学：文法理論、正書法、正音法）

髙井　絹子（20世紀文学・文化・思想：バッハマン、ウィーン世紀末文化）

長谷川　健一（18・19世紀文化・文学：敬虔主義、ツィンツェンドルフ）

神竹 道士　教授

KAMITAKE Michio

専門分野

言語学、ドイツ語学

最終学歴 ▶ マンハイム大学

学　　位 ▶ 博士（Ph.D）

［研究内容］

16世紀から18世紀までの統一文章語の確立期から、現代の標準ドイツ語に至るまでの言語規範の成立過程を主な研究テーマとして取り扱っている。その際特に、学校文法における文法規範とその揺れの問題、正書法と正音法にみる文字と音声の関係などに視点を置き、標準ドイツ語の規範概念の歴史的推移に関して研究している。最近の研究テーマとしては、ドイツ語の発音辞典および独和辞典における発音の表記法からみた発音規範の恣意性と中間言語形式を取り上げて研究している。

メッセージ・教育方針

ドイツ語学を専門として研究する前に、学生（院生）の皆さんにはドイツ語の総合的な語学力を磨いてもらいたい。会話が得意な人、読解力に自信のある人、それぞれ得て不得手があるかもしれないが、ドイツ語で「読む、書く、聞く、話す」能力を万遍なく身につけることに、謙虚に取り組んでほしい。

［主要業績］

［著書］“Johann Jakob Hemmer und sein Beitrag zur Verbreitung der neuhochdeutschen Schriftsprache in der Pfalz ”(Peter Lang Verlag, 1987)
［論文］“Einige Bemerkungen über die„ Prinzipien der Sprachgeschichte“von Hermann Paul”（北海道大学言語文化部紀要，第22号，1991）
「標準ドイツ語とは何か？― 18 世紀の文法家と言語規範―」（大阪市立大学文学部『人文研究』第 51 巻第 3 分冊，1999）
「＜r＞音からみたドイツ語発音規範の推移」（大阪市立大学ドイツ文学会『Seminarium』第 33 号，2011）
［教科書］『中級ドイツ語へのステップアップ―副文中心―（改訂版）』（白水社，1996）
『ドイツ文法ベーシック３（改訂版）』（朝日出版，2016）

髙井 絹子　准教授

TAKAI Kinuko

専門分野

20 世紀ドイツ語圏文学・文化

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

20世紀ドイツ、オーストリアの文学・文化・思想が研究対象です。目下とくにオーストリアの戦後作家インゲボルク・バッハマンの作品を読んでいますが、この作家の作品を読み解くためのキーワードをいくつかあげれば、言語懐疑、47年グループ、アウシュヴィッツ以後、フェミニズム、パロディ、間テクスト性と幅広いため、戦後ドイツ語圏の社会的歴史的動向はもちろん、ドイツ語圏以外のヨーロッパ文学も関心の対象です。

メッセージ・教育方針

文学作品は、作家の個人史と歴史の交点に生まれます。テクストを精確に読むためのドイツ語力を鍛えるだけでなく、歴史、文化、思想について知識を蓄え、テクスト成立のプロセスをも視野に入れる総合的なテクスト読解力を養いましょう。

［主要業績］

［著書］『世紀を超えるブレヒト』（郁文堂，2005，共著）　『ドイツ文化を担った女性たち』（鳥影社，2008，共著）
［論文］「50 年代のインゲボルク・バッハマン」（『阪神ドイツ文学論攷』第 52 号，2011）
「インゲボルク・バッハマンの放送劇『マンハッタンの善良な神』―二つの顔を持つ神―」（『世界文学会』第 116 号，2012）
“Ingeborg Bachmanns Unter den Mördern und Irren ― zur Variierung der Täter-Opfer-Konstellation ―”（『オーストリア文学』第 33 号，2017）

長谷川 健一　講師

HASEGAWA Kenichi

専門分野

18・19世紀ドイツ語圏文化・文学

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

18・19世紀の文化と文学（作家で言えば、ゲーテ、ジャン・パウル、ノヴァーリス等）を、その歴史的・社会的背景も含め、総合的に研究している。現在は、17世紀末に始まる信仰刷新運動である敬虔主義（ピエティスムス）と、その流れを汲むヘルンフート同胞教団の活動がドイツ語圏の文学作品に与えた様々な影響について、主としてモティーフ研究の観点から考察している。ここ数年は、アルベルト・シュバイツァーの説教の翻訳にも取り組んでいる。

メッセージ・教育方針

文学作品をどのような方法論に基づいて分析・考察するにせよ、まずは原典のテクストにあたり、腰を据えてじっくり読もうとする姿勢を忘れないこと。資料の調査・収集に際しては、現地の図書館や資料館に赴き、関係者と情報交換する機会も積極的に作ってください。地道な努力は全て、新たな研究の貴重な足がかりとなります。

［主要業績］

［著書］『ドナウ河―流域の文化と文学』（晃洋書房，2011，共著）
［論文］「ノヴァーリス文学とヘルンフート同胞教団―二つの断片におけるヘルンフート・モティーフと『青い花』の解釈をめぐって―」（『セミナリウム』第31号，2009）
「N. L. v. ツィンツェンドルフの身体観―「血と傷の神学」と「イエスのからだ」の視覚化をめぐって―」（『阪神ドイツ文学論攷』第45号，2003）
［書誌］“Pietismus-Bibliographie(Japan)”（*Pietismus und Neuzeit*, Bd.38, 2012, Vandenhoeck & Ruprecht）
［翻訳］「シュバイツァーの説教から（承前）」（『シュバイツァー研究』第31号，2016，共訳）

フランス語圏言語文化学領域

言語文化学専攻

専修紹介

本領域は、ドイツ語圏言語文化学領域と連携することで、過去も現在も欧州を牽引するドイツとフランス両国を中心としつつ、ベルギー、スイス、ルクセンブルクなどの欧州や、ケベックやハイチなど南北米大陸、アルジェリア、チュニジア、モロッコ、セネガル、コートディヴォワールなどアフリカ、タヒチなどオセアニアにひろがる世界のフランス語圏の言語、文学、文化、歴史、社会などについて、教育・研究・社会貢献をおこなっている。かつての名称である「フランス語フランス文学専攻」は、ほかの大学においてもなされうる学問領域をあらわしていたが、フランス語圏学を標榜する専修はきわめてすくない。このことは、もちろん、伝統的フランス文学研究をすてさるものではなく、そのうえに、ひろく世界のフランス語圏に眼をむけていることをしめしている。

本領域の教員は、20世紀文学、言語学、文化研究を専門としているが、それぞれ興味、関心の範囲はひろく、これまで指導した学生の論文については、文学研究はもちろんのこと、メディアの言説分析、宗教文化の歴史的展開、挿絵論、ダンス論、建築などのテーマについての指導をおこなってきた。

また、現役の院生と教員にくわえ、OB／OG院生、退職教員からなる「大阪市立大学フランス文学会」を組織し、研究発表会・シンポジウムのほか、年刊機関誌『Lutèce』を発行、研究成果の公表につとめている。

教育方針

「フランス語圏学」をかかげる本領域では、ひろくフランス語圏に関する言語、文学、文化、社会、歴史をあつかうが、前期博士課程の学生にたいしては、その専門にかかわらず、できうるかぎり広範囲な学びの機会を提供し、同時に、論文執筆のための教えを授業の内外において提供することにより、学生じしんがみずから課題を発見、解決していけるような自律的研究者にそだてる。修士論文執筆へむけてのおもなスケジュールは、以下のとおりである。

1年次4月	テーマ提出、指導教員決定
1年次5～12月	毎月の中間報告会
2年次10月～12月	論文執筆
2年次1月	修士論文提出

また、後期博士課程の学生にたいしては、その専門によりそい、3年間で博士論文を執筆できるよう、最大限の便宜をはかると同時に、国内外の学会や研究会出席、留学などをサポートすることで、学生の経験値をゆたかにすることをめざしている。

なお、社会人大学院生にたいする、研究環境についての個別配慮もおこなっている。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/frn/

専修の特色

教室行事

現役の院生と教員にくわえ、ＯＢ／ＯＧ院生、退職教員からなる「大阪市立大学フランス文学会」において、年に２度の研究会を開催、学びと交流の機会を提供するほか、学部と共通の懇親行事をいくつか実施している。

出版物

上記大阪市立大学フランス文学会において、年刊研究誌『Lutèce』を発行している。最新号は第41号である。

その他の特色

教員の所属する学会には、大阪市立大学フランス文学会のほか、日本フランス語フランス文学会、日本フランス語学会、日本フランス語教育学会、日本演劇学会、外国語教育メディア学会、日本言語学会、社会言語科学会、日仏女性研究学会がある。

所属教員

福島　祥行（コミュニケーション、相互行為研究、会話分析、言語教育−学習、アクティブラーニング、言語学、仏語圏学）

白田　由樹（19 世紀末フランスのジェンダーおよび人種表象、19 世紀都市文化）

原野　葉子（20 世紀フランス文学における言語遊戯と科学、ヴィアン、ウリポ）

福島 祥行　教授

FUKUSHIMA Yoshiyuki

専門分野

言語学・フランス語圏学

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

わたしの研究の関心は、言語、相互行為分析、協働学習、ポートフォリオ、現代フランス語圏社会、劇場論と多岐にわたりますが、その中心にあるのは「コミュニケーション」です。コミュニケーションとは、ひととひととのやりとり（相互行為）のことですから、すべてはコミュニケーションの問題に帰着するとわけです。具体的には、会話の現場のミクロ分析や、学びあい、言語学習法、言語の政治性、異界と境界などについて、構築主義的視点から研究しています。

メッセージ・教育方針

学問の先達としてできるかぎりのサポートをおこなうことはいうまでもありませんが、教えることは学ぶことであり、教員もまた学びつづける存在です。ともに学ぶことを第一にしつつ、言語や社会に関心のあるみなさんと、あらたな学問を生みだしてゆきたいとかんがえています。

［主要業績］

［著書］『キクタン　フランス語会話　入門編』（アルク, 2016）

［論文］「グループ・ワークにおけるふりかえりの生成―フランス語初級クラスの相互行為分析から―」（*Revue japonaise de didactique du français*, 11, 日本フランス語教育学会, 2016）

「都市・境界・アート―コミュニケーション空間の相互行為的生成について―」（都市研究プラザ編『URP GCOE DOCUMENT』13, 水曜社, 2012）

「意味とシンタックスの協働的構築―構築主義的コミュニケーション研究のこころみ 3―」（『人文研究』第 60 巻, 大阪市立大学大学院文学研究科, 2009）

白田 由樹　准教授

SHIRATA YUki

専門分野

19 世紀末フランス文化

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

19 世紀末フランスにおける芸術・文学作品、演劇、ほか各種メディアの中で描かれた「女性」について、伝統的な男女観の変化や当時の社会状況とともに研究しています。現在までに、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて活躍した女優サラ・ベルナールを「新しい女性」としてとらえなおし、その自己表象のあり方を再検討する研究を行ってきました。また、近年はジェンダーの視点だけでなく、人種や民族問題を含めたさまざまなイメージの生成過程を、当時の文学・演劇や報道言説の中に探っています。

メッセージ・教育方針

フランスへの憧れでこの分野に入る人は（全てではなくとも）多いと思いますが、私もそうして研究を始め、「フランス的なるもの」の生成過程を追う間に、自分が生きている今の日本を意識することが増えました。心に引っかかる現象を探究しながら、広がり、つながる世界を見出し、語る力を互いに鍛えていければと思います。

［主要業績］

［著書］『サラ・ベルナール―メディアと虚構のミューズ―』（大阪公立大学共同出版会, 2009）

［論文］"Sarah Bernhardt comme la Muse de la décadence : Roman à clef Dinah Samuel de Champsaur," (*Lutèce*, n.38, 2010, 大阪市立大学フランス文学会）

「サラ・ベルナールとオリエント女性の表象―サルドゥのオリエント歴史劇『テオドラ』を中心に」（『演劇学論集』55 巻, 2012, 日本演劇学会）

「川上音二郎・貞奴が演じた「東洋」― 1900 年パリ万国博覧会における日仏の位相から―」（『人文研究』第 64 巻, 2013, 大阪市立大学文学研究科）

原野 葉子　准教授

HARANO Yoko

専門分野

現代フランス文学・文化

最終学歴 ▶ 京都大学大学院人間・環境学研究科

学　　位 ▶ 博士（人間・環境学）

［研究内容］

専門は20世紀フランス文学・文化。とくに実存主義時代のユースカルチャーを牽引したボリス・ヴィアンの文学作品と、彼が属した前衛的研究集団「コレージュ・ド・パタフィジック」、それからコレージュの下部組織として出発した「潜在文学工房」を主な研究対象としています。「科学とは何なのか？」という問いを芸術・文学の側から思考するとともに、西洋近代における科学技術の高度な発展の必然的帰結としての「世界大戦」、その記憶と表象の問題についても考察を進めています。

メッセージ・教育方針

一冊の書物との出会いが、世界の見え方を一変させてしまうことがあります。フランス語圏の豊穣な芸術・文化という「窓」を通じて、知らなかった風景を見つけにゆくこと、自由の風を肌で感じること――そうしてしなやかに、より創造的に生きてゆくための力をみなさん自身が育んでいけるよう、サポートできればと考えています。

［主要業績］

［訳書］ボリス・ヴィアン『夢かもしれない娯楽の技術』（編訳，水声社，2014）

レーモン・クノー『文体練習』（松島征・福田裕大・河田学と共訳，水声社，2012）

［論文］“Science et littérature chez Boris Vian — Autour de la discontinuité —”（*Études de langue et littérature françaises*, no107, 日本フランス語フランス文学会，2015）

「微視的な眼―『日々の泡』のマテリアリスムについて―」（『広島大学フランス文学研究』第31号，広島大学フランス文学研究会，2012）

言語応用学専修

言語文化学専攻

専修紹介

言語応用学専修は、個別言語の諸特性を研究対象とすることに加えて、複数の言語の対照研究、言語獲得の研究といった多角的な観点から言語を分析することを目的としています。本専修は、各教員の主な研究分野の講義・演習とともに、教員、学生全員が参加する合同ゼミに特色があります。院生は、自分が興味をもつ分野を中心に研究することができますが、合同のゼミでは、発表内容に関して多様な観点から、助言を受けることができます。様々な研究歴をもつ院生の中には留学生も多く、研究の方向、関連文献の紹介など基本的な事柄に関しても十分な指導を受けることができます。教員の専門は、英語を主な対象言語とした語用論、神経心理言語学の観点からの言語獲得、東アジア言語を中心とする言語類型論、様々な言語理論に基づいた日英語の語用論・文法論など多岐に渡っています。各教員はそれぞれの専門分野の特性を生かしながら、文化的コンテクストも含めた言語の多面的特性を研究しています。

教育方針

本専修では文献研究とともに、様々な言語媒体およびコーパスに基づいた言語事実を重視する指導を行なっています。理論研究も重要ですが、自ら実際に収集した事実により、先行研究の不備を明らかにしたり、新たな言語現象の発掘に基づいた問題の提起など実証的な研究を重視しています。本専修は、社会人学生、留学生が多いことも特色のひとつです。彼らは実際の教育の中から生まれた疑問・問題点の解明を求めて研究し、あるいは帰国後の日本語教師としての立場から、母語と日本語の対象研究を行なっています。院生は課題を自由に設定することができますが、その動機を尊重しながら、課題の妥当性、使用する言語資料の妥当性、拠り所となる言語理論の選択およびその妥当性などについて十分な指導を心がけています。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/cpr/langs/

専修の特色

教室行事

教員、院生全員が参加する合同ゼミを月に1回程度開催しています。ここでは、院生の修士論文、博士論文作成のための研究発表をもとに、教員、院生による自由で活発な議論がなされています。

毎年11月の初めに「言語情報学会」を開催しています。そこでは、教員、大学院生の研究発表といったアカデミックな場と卒業生、修了生の近況報告といった同窓会的な場が提供されています。

出版物

毎年3月末に研究誌『言語情報学研究』を刊行しています。

所属教員

関　茂樹（統語論、語用論）

井狩　幸男（神経心理言語学、応用言語学）

山崎　雅人（言語類型論、認知言語学）

田中　一彦（意味論、語用論）

関 茂樹　教授

SEKI Shigeki

専門分野

語用論

最終学歴 ▶ 筑波大学大学院文芸言語研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

英語を主な分析対象として、文の形式と意味の対応関係を研究しています。伝統的な文法理論の枠組みに依拠しつつ、新しい言語理論を組み込んだ折衷的方向を目指しています。小説・インタビューなどの資料に基づいて、これまで分析されることのなかった言語現象を取り上げ、その諸特性を明らかにすることを基本的な目標としています。母語話者にとっては当たり前で、それほど注目されていない現象に気づき、その特性を明らかにすることは興味深い仕事です。

メッセージ・教育方針

講義・演習では主に英語の文献を使うので、内容をできるだけ正確に理解する努力を続けてください。論文で引用する例は、小説などからの抜粋が多いこともあり、文脈がわかりにくい場合もありますが、様々な文章に慣れるという意味からも必要な作業です。言語学の基本文献を並行して読んでおくことも重要です。

［主要業績］

［著書］『英語指定文の構造と意味』（開拓社，2001）

［論文］“Left Dislocation and Multiple Focussing in Clefts,”（*Distinctions in English Grammar*，開拓社，2010）

「否定辞を含む省略節の語順と機能」（『英語語法文法研究』第 20 号，2013）

「知覚動詞補部の多様性」（『言語情報学研究』第 10 号，2014）

井狩 幸男　教授

IKARI Yukio

専門分野

神経心理言語学・応用言語学

最終学歴 ▶ 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

最大の関心は、言語獲得システムの解明です。「ヒトはなぜ言語を獲得できるのか」という問題に関して、言語獲得の一番根本にあるはずのメカニズムは、依然として解明されていません。この問題の解決の糸口として、私は、「エントロピー」の視点に基づく自然現象の説明の仕方に注目しています。これは、熱力学の研究から生まれたものですが、このエントロピーの原理が言語獲得にも作用していると考えると、乳幼児の言語獲得を促進させる原動力が一体何なのかが、解明されることにつながる可能性があると考えています。

メッセージ・教育方針

院生のみなさんには、「なぜ」という疑問を常に感じていて欲しいと願っています。「なぜ」という疑問を持ち、それに答えようとすることが、考察する対象の原理の解明につながるからです。私の専門分野は、既存の概念が新たな発見によって塗り替えられる可能性の高い分野です。受講生との活発な議論を期待しています。

［主要業績］

［著書］『バイリンガリズム入門』（大修館書店，2014，共著他３名）

『小学校外国語教育の進め方―「ことばの教育」として―』（岡秀夫、金森強（編著），成美堂，2012，共著他10名）

［論文］「神経心理言語学からみた英語教育への提言」（『現代社会と英語―英語の多様性をみつめて』金星堂，2014）

「生きたことばを習得するための英語教育―母語獲得と脳科学の研究成果を踏まえて―」（博士論文，2009）

［訳書］『子どもの認知と言語はどう発達するか―早期英語教育のための発達達心理言語学―』（ジョン・オーツ／アンドルー・グレイソン（編）井狩幸男（監訳）河内山真理／高橋幸子／横川博一／吉田晴世（訳），松柏社，2010）

山崎 雅人 教授

YAMAZAKI Masato

専門分野

言語学

最終学歴 ▶ 東北大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

言語学一般の知識を基礎として、中国の少数民族言語である満洲語の研究を行っている。この言語はすでに話し言葉として使用する人数が減少し母語として次世代に継承することは困難になっているが、清朝時代に使用された状況を多くの文献により明らかにし、周囲のモンゴル語や中国語との関係を考察するとともに、中国での現地調査を通じて、一千万と言われる満洲族が民族言語として初等教育で学ぶ現代満洲語を、言語と社会の関係を考察するための研究対象としている。

メッセージ・教育方針

言語研究が対象とする言語に対する知識を欠いては成立しえないのは言うまでもない。母語であれ、それ以外であれ、どの言語を研究するにせよ、その言語そのものに対する継続的な勉学は不可欠である。語学能力を高めたうえで、理論的な知識を身につけるようにすると良いと思う。学問に早道はないと考えるからである。

［主要業績］

［論文］「インドネシア語における認識動詞の使役形・受動形の意味素性について」（『言語情報学研究』第 10 号，2014）
「満洲語文語の因由文」（『アルタイ学研究』第２巻，2008）
「『御製百家姓』における満洲文字による漢字表音について―漢語の舌面音化を中心に―」（『満族史研究』第７号，2008）

田中 一彦 教授

TANAKA Kazuhiko

専門分野

意味論・語用論

最終学歴 ▶ 筑波大学大学院文芸言語研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

研究テーマは大きく2つに分けられます。1つめは、英語の時制研究です。英語の時制に関わる様々な現象や時の解釈に関わる問題を文レベルの要因にとどまらず、談話レベルの要因を考慮に入れた包括的な分析をするのが私の時制研究の特徴といえます。2つめは、我々の身近な言語表現の言語学的分析です。たとえば、巷で日本語の誤用としてよく耳にする「全然おいしいよ」といった「全然+肯定形」表現や、道路で我々がよく目にする「落石注意」といった表現に注目し、それらの言語学的分析を試みています。

メッセージ・教育方針

ことばに対する感性を研ぎ澄ませましょう。学部時代に培った「ことばアンテナ」の感度を高めて、プロフェッショナル・バージョンにアップグレードしましょう。研究材料はあちらこちらに散らばっています。アンテナにひっかかった「ことば」にとことんこだわりましょう。そんな力をつける授業を目指しています。

［主要業績］

［論文］“On the Non-Perfect tense in the temporal Since-Construction in Discourse,”（*Distinctions in English Grammar offered to Renaat Declerck*, Kaitakusha, 2010）
“Constraints on tense choice in reported speech”（*Studia Linguistica* vol. 50 Blackwell, 1996, 共著 (Renaat Declerck)）
「談話から見た since 構文の主節における現在時制」（『英語語法文法研究』第 15 号，2008）
「「全然おいいしいよ」は問題な日本語か」（『言語情報学研究』第 1 号，2005）

表現文化学専修

言語文化学専攻

専修紹介

「表現文化学」は、その名称にあるように「文化」を対象とする研究のセクションまたアプローチです。もちろん、あらゆる人文学の研究領域は何らかのかたちで人間の作り出した「文化」を研究対象としているわけですが、「表現文化学」は次のようないくつかの特徴において従来の文化研究とは異なるスタンスをとることになります。

（1）トランスナショナルな文化のダイナミズムへの視点

「表現文化学」は、特定の言語圏・文化圏の内部に限られた文化現象の研究を排除するものでは決してありませんが、トランスナショナルな文化の力学を考察する諸理論を積極的に吸収しながら、それら先行する研究分野を更新・発展させることを目指しています。

（2）さまざまな〈表象〉の形式への視点

「表現文化学」では、言語にもとづく文化的表現だけでなく、映像、音響、身体表現などあらゆるメディウムに依拠する文化現象が分析の対象となりえます。

（3）ポピュラーな文化現象への視点

「表現文化学」では、伝統的な人文学において文化的対象として十分に取り上げられることがなかったサブカルチャー、ポップカルチャー、モード、広告、身体表現などをも重要な研究対象とするとともに、そうした対象を考察するのにふさわしい方法論を探求します。

（4）現代的・理論的視点

「表現文化学」の特徴は、たとえある程度過去にさかのぼる文化現象を対象とするにせよ、その対象を単に過去のものとして研究するのではなく、現代におけるアクチュアリティに結びつけていく視点から取り上げます。

教育方針

[複数指導体制による開かれた論文指導]　本専修では、修士論文ならびに博士論文執筆にあたって、主担当・副担当による個別指導とあわせて、定期的に合同発表の機会を設け、専修の教員全員が論文執筆の相談にあたる開かれた指導体制を取っています。

[研究者のみではなく高度専門職業人の養成をも重視する]　現代の文化現象を扱う本専修では、修了生の進路として、研究者はもちろん、芸術・文化製作に携わることができる高度専門職業人の養成をも重視しています。創造的研究成果を発信する研究者のみならず、演劇製作やアートコーディネイトの分野で、最新の学問的知見に裏打ちされた文化創造を担う人材育成をめざして、本専修では実践的な「アーツマネージメント」授業も開講しています。また社会人入学に対しても門戸を開いており、長期履修制度の活用で、勉学と職業生活などとの両立も可能となるよう配慮しています。

[国際的な場で活躍できる研究者の養成]　言語圏・文化圏を横断する現代の文化現象を扱う本専修では、大学院生にたいして、国際学会での発表、研究成果の英語による発信、大学内外の制度を活用した海外研修への参加を奨励し支援しています。

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/cpr/arts/

専修の特色

教室行事

[論文指導]　発表会（月1回）、合同中間発表会（年に2回から3回）

[表現文化学会研究発表会]　毎年11月下旬ないしは12月初旬に開催。その時に、卒業生を交えたホームカミングパーティをあわせて開催。

[研修旅行]　教員・大学院生・学部生による1泊2日の研修旅行。毎年9月頃に実施。美術館等で研修を行い、専修・教室の親睦を図る行事。

出版物

雑誌『表現文化』を毎年3月に発行。現在8号まで刊行しています。内容は教員・大学院生・大学院修了生による論文、研究ノート、授業報告、修士論文・卒業論文の要約、優秀レポートなど。機関リポジトリに登録されており、以下のURLから閲覧できます。

http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository

その他の特色

[大阪市立大学表現文化学会]　本専修の教員・大学院生・大学院修了者によって構成された学会です。機関誌『表現文化』を発行し、年1回「研究発表会」を開催しています。

[研究会]　教員主催による「研究会」も開かれています。

所属教員

三上　雅子（演劇学、比較演劇論）

野末　紀之（19世紀末文化論、身体と芸術に関する研究）

小田中　章浩（比較演劇史的な研究、表象文化論）

高島　葉子（民間伝承の比較文化的研究）

海老根　剛（表象文化論、ドイツ研究）

三上 雅子　教授

MIKAMI Masako

専門分野

比較演劇学

最終学歴 ▶ 大阪大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

現代演劇を代表する劇作家のひとり、ベルトルト・ブレヒトの作品及び彼の演劇論に関する研究が出発点でした。現在は、より広い層に享受されるエンターテイメント的要素の強い演劇―具体的にはミュージカルなど―における社会と演劇の関係、演劇における観客の問題が主要な関心となっています。また「映像が作り出す都市イメージ」について近年考察を重ねており、いまは「映画における大阪像」というテーマに取り組んでいます。

メッセージ・教育方針

最新の文化現象を扱う場合においても、そのジャンルを形成してきた歴史的要素ならびに伝統的規範を無視することはできません。また文化現象はいかに自然発生的に見えても、それを作りだし、かつ受容ないしは消費していく社会構造と無関係には成立しえません。常にメタなレベルで文化現象を捉えていく姿勢を養ってほしいと思います。

［主要業績］

［著書］『世紀を超えるブレヒト』（郁文堂，2005，共著）
『ドイツ文化を担った女性たち』（鳥影社，2008，共著）
［論文］「国境なき時代のドイツの映画作家たち」（『ドイツ語圏文化の現在―ベルリンの壁崩壊・東欧革命後 20 年の変化を読む―』日本独文学会、日本独文学会研究叢書 080，6，2011）
「恋する男と行動する女―宝塚歌劇における男性像―」（『表現文化』大阪市立大学大学院文学研究科表現文化学専修，2011）

野末 紀之　教授

NOZUE Noriyuki

専門分野

表現文化学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

19 世紀後半のイギリス文学、とくに唯美主義の研究を中心に行なっている。近年は、ウォルター・ペイターの文体と文体観とを、同時代の政治思想や社会的文脈から読み解くことにより、非国民とされた唯美主義者の抵抗のあり方に焦点を当てている。それは「男性性」や（ホモ）セクシュアリティの問題と密接に関係している。また、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて書かれた英仏露のダンス論を素材に、ダンスが当時の文学者たちにあたえた衝撃や身体と言語との関係といった角度から考察している。

メッセージ・教育方針

外国語であれ母語であれ、文章を読むことは大変な作業です。論理や表現への細心の注意はもちろん、さまざまな補助線を引いて意味を浮上させる力が求められます。そうした力の養成を通じてはじめて閃きが生まれ、閃きを裏づけることができるようになります。そのときの爽快な気分を味わうべく、ともに研鑽を積みましょう。

［主要業績］

［論文］「「ジョルジョーネ派」の批評言語」（『ペイター『ルネサンス』の美学―日本ペイター協会創立五十周年記念論文集』論創社,2012,共著）
「共感、論理、自制―後期ペイターにおける「男性性」の再規定について」（『英文学研究　支部統合号』，日本英文学会，2009）
「語りえぬものを語る―"The Eyes" におけるホモセクシュアリティ―」（『表現文化』，大阪市立大学大学院文学研究科表現文化教室，2007）
「"English" の行方―「エメラルド・アスウォート」の故郷」（『Albion』復刊 51，京大英文学会，2005）
「世紀末のダンス論」（『人文研究』，大阪市立大学文学部，1999）

小田中 章浩 教授

ODANAKA Akihiro

専門分野

演劇学・表象文化論

最終学歴 ▶ 早稲田大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

専門領域（1）：現代フランス演劇を中心とした西洋のモダンドラマの研究（西洋のドラマ（戯曲）の方法論とその時代背景に関する研究）

専門領域（2）：演劇，映画，小説などにおける分野横断的なモチーフ（たとえば記憶喪失や復讐など）の研究

専門領域（3）：演劇と教育の関係に関する研究（教えることと演劇的な発想はどのような関係にあるか）

専門領域（4）：アカデミック・ライティング，プレゼンテーション・スキルに関する研究（論理的な文章を構築するための方法論の探究）

専門領域（5）：アーツマネージメントに関する研究（理論と実践の間をどのように埋めるか）

メッセージ・教育方針

情報が氾濫する現在の世界では，大学における伝統的な「知」のあり方が問われている。そうした状況で学ぶ学生に必要なことは，専門分野について深く学ぶことは当然として，今後知的な世界で生き延びていくための強靭な知性と，進んで異分野の専門家との対話を求めていく，いわば「ケモノ」的な発想と行動力である。そのための「生きた哲学」とスキルを伝授しなければならないと考えている。

［主要業績］

［著書］『モダンドラマの冒険』（和泉書院，2014）　『フィクションの中の記憶喪失』（世界思想社，2013）

『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』（関西地区FD連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター編，ミネルヴァ書房，2013，共著［第3章「モジュールに基づいた小論文作成技法」担当］）

『現代演劇の地層―フランス不条理劇生成の基盤を探る』（ぺりかん社，2010，2011年度日本演劇学会「河竹賞」受賞）

［論文］“La Poésie dramatique face à la catastrophe”（*Etudes de Langue et Littérature Française*（フランス語フランス文学研究），No.100，日本フランス語フランス文学会）

［項目執筆］『岩波世界人名大辞典』（岩波書店，2013［フランス演劇関係人名担当］）

高島 葉子 准教授

TAKASHIMA Yoko

専門分野

民間説話・民間伝承

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

比較文化的視点から、日本とヨーロッパおよび東アジアの民話説話・民間伝承を研究しています。文学や思想などのいわゆる高級文化を対象として日本の文化を他文化と比較するのではなく、一般民衆、特に農村の民俗社会に伝わる説話や伝承を比較とすることで、その世界観や自然観の類似点と相違点を明らかにし、これによって異文化理解に貢献することをめざしています。また、口頭で物語を語ることの持つ現代的意義についても研究を進めています。

メッセージ・教育方針

研究には知的好奇心、独創的発想が重要ですが、大学院での研究にはこれだけではなく、自分の研究に社会的意義があるのかどうかを考えることも重要です。研究者も社会の一員である以上、研究を通していかに社会に貢献できるのかが重要な課題であることを認識しておいて下さい。

［主要業績］

［論文］「ケラッハ・ヴェールと山姥の起源」（『CALEDONIA』第29号，2001）

「ケナシウナルペ―アイヌの山姥」（『比較文化研究』第61巻（別冊），2003）

「アイヌとケルトの異類婚姻譚―カムイと人の婚姻と妖精と人の婚姻」（『説話・伝承学』第14号，2006）

「民間説話・伝承における山姥、妖精、魔女」（『人文研究』第65号，2014）

海老根 剛　准教授

EBINE Takeshi

専門分野

表象文化論・ドイツ研究

最終学歴 ▶ 東京大学大学院人文社会系研究科

学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

現在の主な研究テーマは次の二つです。（1）20世紀初頭（1900年頃～1930年代）のドイツにおいて幅広く流布し、大きな政治的・社会的影響力を持った「群集」をめぐる言説の展開を言説分析の手法も用いて考察すること。ここでは文学や映画だけでなく、哲学、社会学、心理学などの言説も視野に入れた学際的な研究を行っています。（2）これまで別個の分野として研究されてきた映画の歴史とヴィデオの歴史の比較検討を通して、現在の映像文化の解明に役立つ複数的な動画の歴史への視座を得ることを目指しています。

メッセージ・教育方針

表現文化学専修でなされる研究は多様であり、対象もテーマも一義的に決まることはありません。したがって、幅広い視野と関心を持ちつつも、核となるみずからの問題意識を定め、それを掘り下げていく積極的姿勢が欠かせません。大学院の授業では、先行研究を柔軟に読みこなし、みずからの研究に活かしていく能力の養成を心がけています。

［主要業績］

［論文］「〈映画都市〉としてのマドリード　アルモドバルの初期作品における都市表象をめぐって」（『表現文化』第9号, 2015）

"Erfindung von 'Girl'-Kultur. Eine vergleichende Betrachtung des Amerikanisierungsdiskurses der 1920er Jahren in Deutschland und Japan,"（*Transkulturalität. Indentitäten in neuem Licht*, 2012）

「すれ違うふたつのメディア映像―映画とヴィデオを再考する―」（『ASPEKT』45号, 2012）